

くりかへし

「来る途中、そこで一寸した事件があつてね」

「ほう、それは」

「なに、たいしたことではないんだ。僕の帽子が飛んでね」

「だつて、かぶつてゐるぢやないか」

「今はかぶつてゐるさ」

「それが事件かい」

「事件だね。僕にとっては」

「自分でたいしたことではないと言つてゐるにしても、事件とはおそれいつた」

「君は知らないからさ。本当を言ふと、たいしたことではないどころか、大事件と言ひたいのだ」

「どうして」

「話さうか。話してわかつてもらへるかどうかあやしいものだ。君には結局はわかつてもらへないだらう。このうす暗い喫茶店で話すにしては気の滅入る話なんだけどな」

「別れた妻の話に関係あるのか」

「まあ、その系列なんだな」

「やれやれ」

《帽子のこと》

来る途中で、僕のかぶつてゐる帽子が風に吹き飛ばされた。うしろから風が吹きあげ、僕の前に帽子がコロコロとこころがつた。僕がそれを追ひかけた。次のやうな様子を心にうかべてくれたまへ。僕の歩いて来た人道のあたりは夕もやにつつまれてゐた。埃は黒いヴェールのやうにゆれて、うす暗さをよりうす暗いものにしてゐた。左側にはコンクリートの壁が続いてゐる。荒くぬつたもので、たてに箒の目のやうなものがついて、しめり気をおびてゐた。車道をたくさんの自動車が走つてゐる。僕の歩く方が交叉点で止まつては、のろのろ進む自動車より早い。さつき追ひこして行つた自動車を僕がまた追ひこしたりした。何度かさうした。気ぜはしい空気が支配し、暗さが増すことで不安な空気にみちてゐたともいへる。人道を歩いてゐたのは僕だけで、前後に人の姿はなかつた。墨色の埃はよどんでゐた。すべてが墨色の埃のために染まつてゐた。風が吹いてゐるので気をつけてはゐたものの、不覚にも僕は帽子を風に奪はれてしまつた。問題はここからはじまる。がくがくつと音を出したのは自動車だつたにしても、それまでは秩序あるよどんだ風景だつたのが、活人画の中の人物のやうな僕であつたのが、走りをはじめることになつた。

僕は自分の帽子を愛してゐた。裏返しをしてみたり、頬ずりをしたり。僕の右手の拳骨を、何度その内側にもぐりこませたことだらう。帽子の中で拳骨をひらいたり、閉ぢたり。左手で、右手くびをしつかり押へて、帽子の中の右手の拳骨をきゆつきゆつとこすつてゐるうちに、妙な、うつとりした気分を味はつたこと。指の先に目がついてゐるのか、帽子の内側のひだの様子がよくわかつた。指の先に鼻がついてゐるのか、油つくさいのにはまゐつた。めくれ具合があんまりよくわかるので、僕は自分の目を思はずそむけたことがある。こすられて熱つぽくなつた感触は、油くさくなつて、僕は鼻をぴくぴくさせた。どこへ行くのにも僕

は帽子をかぶった。夕暮の帰宅には重くのしかかった。鉄のやうに重く感じたこともあつた。舌でなめてみると、しよっぱい汗の味がした。すつぱり頭をつつんでくれてみると僕は何といふこともなく安心だつたのだ。元気が出て、動きも早かつた。

僕の前を逃げるやうにして、すうつと飛んだ帽子は、黒い鳥に似てゐた。僕はすぐにつかまへることが出来ると思つてゐたので、はじめはわざと、ゆつくりと走つた。ところが、どうして、どうして、道におつ立つて、ぐるぐると風車のやうに回転した。黒いふたが走るやうにまはりに人道の埃をからませて走りはじめた。車道に行つてしまつたら大変だ。車の下じきになつたら、取りに行くこつちの身があぶない。僕は右手をのばして、帽子をつかまうと、いつしんに走つた。

この姿を横から見ると、コンクリートの箒の目を背景に、右手をのばして、上体を斜めに傾けてゐることになる。右手の前方に黒い円形の物体が回転速度を増しつづ前方に進行してゐる。一瞬の動作を銅版画にとどめるならば、これはこれでなかなかいいのではないか。墨をうんとこく重ねて、線は出来るだけ細く表はすことで、流動の趣がある。埃が、夕闇が、全体にうまく調子を出してのしかかるやうにするならば、画面の左下には十分の五とか、十分の六とかまでは売品として、しばらく画廊の壁にかかつてゐても、程なく誰かの書齋にガラスばりの額ぶちのまま置かれることになるのではないか。周囲の白い紙がこの一瞬のあわただしい空気をもりあげ、見る人間の心のささやかな動きにも、手をふれることになるのではないか。帽子がいびつな黒い球のやうに存在を主張して、地上を這つてゐるのが、猫だか犬だか、魂だかといふことで、ふはつとした感じと、どつしりした感じと、危機感を盛りあげることにならう。

《輪まはし》

さういふのとは別に、もう一つの見方も出来る。帽子を飛ばされて走つてゐる僕は、外面のさういふ暗さとは別のものを感じたのだ。精神的には猛烈に元気だつた。エネルギーにみちみちてゐた。一瞬の風の方で、よみがへつたのだらうか。僕は生き生きと走つてゐた。元気だと言つても、単純に元気であるといふのではなく、感情もなまなましいものであつたといふ意味だ。僕たちの少年時代に流行した遊びに輪まはしといふのがあつた。君はやつたことがあるだらう。僕はあの輪まはしがやりたくてたまらなかつた。しかし、僕がやりたかつた時、僕はまだ小さくて、やってみても出来なかつた。その遊びがもう一度流行した頃には、僕はもう大きくなりすぎてゐて、やりたくても熱中することがをかしく思はれるやうな年頃だつた。その頃、一回位はやつてみた記憶もある。上手く出来たが、ちやりんちやりんと、針金がふれあふ音に満足して、すぐやめてしまつた。輪まはしといふのは太い針金でつくつたもので、輪があつて、その輪が一本の針金の先端の小さい円の中を通つてゐる。術者は、つまり輪まはしをする者は利き腕の方で針金の先端を持つ。輪を路面と直角に立てて、針金の先端の小さい円の中をくぐる輪が、ずうつと立つて回転するやうに按配して、うしろから針金で押すやうなつもりで、ずうつと輪をころがして行く遊びである。路面の平面がつづく限り、術者の進行に先行して針金の輪はちやりんちやりんといふ軽快な音を立てる。坂道を下る時など、針金を輪の前の方の下端にのぼすと、輪の重みでうまく力を要することなく走らせることが出来るのである。二人あるひは三人で、平行して路面を走りながらたのしむのである。今日のやうに自動車の往来がはげしくなつてしまつては、とても流行することは考

へられない。しかし場所さへあれば、危険もなく、軽快なたのしい遊びなのだ。少年ばかりでなく、少女もたのしむことが出来る。流行した頃には、少女のカン高い声が青空にひびき、針金の音と交つて、少女の走行を邪魔する少年とのもつれた様子を、声だけで知ることがもあつた。僕はこの遊びをたのしむことは出来なかつたが、非常に魅力を感じた。輪まはしをしてゐる少年の姿を線画で描いた見事なカツトを見たことがある。体軀を十分に伸ばし切つて走る少年、右手の先端に直線の針金をさしのばし、その前方を円形の針金が走つて行く。カラカラと音を立ててゐる様子が、地面は描いてないのに、直接的に感じられた。少年の右足はくの字に、左足は後方にはねてゐる。気持よく伸びきつてゐる。そのため、余白までがある一つの雰囲気を持つて、たのしい感じのものであつた。白描のよさとも言へる。明るい全体がのびのびとしてゐる。僕が帽子を追ひかけてゐる図が、かういふものと同一のものであるとは言へないが、見方によつては、かうだつたとも言へないこともない。ただ、あくまで内面のものだ。あの時の周囲の状態は、なんといつても、夕方だつたのだし、暗い感じのもので、これまでのべた二つの図柄の、どちらかと言へば前者の方がたしかに似つかはしい。輪まはしのことを言つたのは、なまなましい感じを言ひたかつたのだ。その点に限るならば、後者の方の実感、僕の涙ぐんでしまつた感動の瞬間をわかつてもらふためには適切なものであらう。僕が帽子を飛ばした時の姿は、輪まはしの少年の姿勢とは全くちがつて不恰好そのままであつた。みにくい身体の線の崩れ、力が妙な具合に配分された上に、見込のつかない帽子の行動にゆれ動いてゆく身体全体の動きは、みにくさを、線の乱れをより増した。風は思つたより力強く帽子をかり立てた。砂埃をまき上げながら、僕の帽子をさらつて行つた。

《帽子との距離》

僕の距離感覚を上廻つて、帽子は速度を増した。やつと追ひついて、低く右手をさしのばして、地面すれすれのところで帽子に触れた。帽子は、さらに、地面を這つたかと思ふと、円周をおつ立てて、カラカラといふ音をたてたのかとさへ思はれた。並木の根元をかすつて、車道と人道の境界線に乗つて、一時は車道までころがり出ると思つたのだが、カーヴを描いて人道にもどると、なほさら速力を出した。横から見た場合に、たしかに輪まはしの少年と同じ姿勢をしたのだ。僕の指先に帽子のやはらかい布地の感触が伝はつた時は僕の中で叫び声をあげた。言葉にすれば、しめた、といふ簡単なものだ。もちろん自分の手中に帽子をとりもどしたと思つたからこそ、しめた、と言つたのだが、帽子は手中にとりもどすことは出来なかつた。状況はさう単純ではなかつた。全く夜になつてゐた。吹き抜ける風には砂がまじつてゐた。砂つぶが顔面を打つた。うしろから吹いてゐる風が、僕の顔面にまで、砂をたたきつけるのだ。風はうつむく僕の顔をめがけてゐるのであらうか。僕の目は血走つた。ああ、悲劇的だ。ああ、これこそ僕の人生の型ではないであらうか。輪まはしの輪は太い針金の直線の先端につくられた小さい輪をくぐつて回つてゐるのだから、止まれば、輪は、チャリンと止まる。帽子の輪は、僕の指をかすめたあとは、ふはつとおつ立つて、全体が黒々と自立して地をかすつて走つて行つてしまふのだ。僕と帽子との距離僕と帽子とのあひだには絶対の空間が存在するのである。僕を恐怖がおそつた。これは永遠にかうなのではあるまいか。僕の人生は、永遠に追ひかけ、自分の所有物であるのに、それに、もはや手をふれることは出来ないといふ状態に、いつもなつてしまふのでは

ないか。周囲は夜の荒野である。僕の頭の中をかけめぐる思想は、氷のやうにつめたく、透明であり、白く、絶望的なものであつた。永遠の問題である。僕と帽子との、その時の距離を、そのままに定着して考へることが可能なものとして、僕の手中にはまだ何ものもとらへてはゐないのだ。定着し得るものでない以上、動きを再現させれば、僕と帽子との距離は、僕の努力がない以上はもつともつと遠ざかるといふことになる。僕は追ひかけなければならない。これが人生であるといふならば、僕は人生を否定してしまひたい。さうではないか。帽子は僕のものだ。僕が金銭を支払つて自分のものにした。僕のものであると言つても誰も、この世の約束の上に立つものは否定しないし、否定し得ない。それを、風が突然うしろから、僕の頭から奪つた。風は僕の帽子を奪ふために吹いたわけではない。砂埃は僕の意志を弱めるために僕の顔面にたたきつけてゐるわけではない。僕の意志は弱められ、僕の帽子は僕の指から遠ざかる。僕と帽子との距離はちぢまらない。たとへ銅版画の一枚の図柄によくとも、カットの一枚の、輪まはしの少年の姿勢に似てゐようと、僕は何ものかを失はなければならない。どんな状態で帽子が僕の手の中にもどるものなのか、予測の出来ない時間の経過が進行しつつある。僕は風に帽子を飛ばされた。僕は追ひかけてゐる。左側はコンクリートの壁。右側は車道で自動車走つてゐる。夕暮から夜にのめりこむ時刻で、墨色の都会の埃にみちてゐる。帽子に手がとどきさうになる。輪まはしをやる少年の明るい姿勢。僕のつんのめるやうな姿勢。帽子との間の空間。帽子との距離。空間的距離と、距離そのものについての考察。人生の典型。絶望感。整理してみると、こんな風なことをくりかへして僕は言つてゐるにすぎないのだ。ああ、悲劇的だ、と僕は心の中で叫んでゐたのだ。まさに、かうしたことの進行してゐる最中、僕の心の中だけではなく、僕は、さつき輪まはしのこの時に生き生きと走つてゐたと言つたが、僕は生そのものを感じたのだ。絶望と同時進行に、希望を僕は感得した。生そのものの喜びを感じた。僕が本当に話したいことは、この生にふれ得た喜びなのだ。事件と言つたのは、僕が生にふれ得たことだ。(涙をかくすことはむづかしい。目を見張つて喫茶店の入口の方を、わざと遠くの方を見てゐるふりをしよう。うつむいて話に間をもたせてゐるやうにふるまつた方がいいかもしれないが。あの女のことに未練があるからではない。ふつと、涙がこぼれてしまひさうになる。生にふれ得た喜びさへ、僕は今度は、さかさまの状態での事件を話さなければならない。涙がこぼれさうな僕は、真面目な人なのだ。あんなことがあつたにしても。あんな言葉を投げかけて別れたにしても。どうしてだらうな。とめどもなく涙が流れはじめた……)

《ベツトの争奪》

「よく見ておきなさい。あなたのお父さんといふ人は、かういふ人なのです」

涙ぐんで言ふ妻の言葉。妻と言つてよいかな。妻であつた人と言つてよいかな。別れることがきまつてゐたのだから、妻ではなかつたかもしれない。庭先で鳴いてゐた蟬さへ、ふつと、しづかになつたほど、かん高い声だつた。室のすみに立つたまま父親と母親とをみつめてゐた幼い子供。その子は妻の所に置くことに話は決つてゐた。僕がそれまで住んでゐた家を出ることになつてゐた。その家が妻の父母の家だつたから、当然さう決つた。僕は自分の荷物をまとめ、車をよんでそれに積み込んだ。僕が自分の買った本をまとめてゐるときでさへ、それはいつしよに買ったのだから残してゆくべきだとか。ああなるものかなあ。一片の木切れさへが二人の所有権の争ひのまとなつた。僕はすべてのものに自分の所有権を主

張したばかりでなく、ひつたくるやうに奪った。だから、引越しの荷造りがはじまつてから、仲のよい夫婦のやうに、妻は僕の側を去ることはなかつた。子供のおどおどした眼は二人の争ひの上を去ることはなかつた。家の中で三人は一団となつて移動した。もう、僕のものではないのは、子供だけであつた。あとのものは、僕の所有権の主張が第一にあり、妻の抗議があり、暴力があつて、確実に僕のものになつた。君が来てくれればよかつたのに、都合がわるくて君は来られなかつた。仕方がないので別の友人が来てくれた。ああいふ時の女の声つて、すごいものだね。一寸手が触れても、互に不潔であると思つてゐた頃だから、ロボツトがパチパチ動くやうに、憎みあつた骨を打ちあはせてゐた。互のあひだの物質の方がやはらかいもので、それをひつぱる二人の手の方が金属のやうにつつぱつて硬かつた。

「これも持つて行くつて言ふのね。畜生」

「あたりめへぢやねえか」

僕の声は低く確実に、しかも、すごみを利かせたものであつた。

「僕のは、僕のものだから」

「見ておきなさいよ。かういふことを」

僕は畳の上のごみでさへ持つて行きたかつた。一団の三人と、手伝ひの友人の外に、まだこの有様を見てゐるものがあつた。僕はそれを知つてゐた。室の襖を細くあけて、のぞいてゐる四つの目を。上下に重なつて、頭が二つ。僕は二つの鼻、二つの口、四つの目、みにくいしわだらけの黒ずんだぢぢいとばばあの怒りにふるへた妻の両親の顔を感じてゐた。娘を可愛いと思ひ、ふびんと思ひながらも、手出しひとつ出来ない。襖の向ふで、坐りこんで立てない妻の母、つつ立つて理性的にならうとしながらも胸をかきむしる思ひの妻の父。身動きもせずの一部始終を心にたたみこんでゐる。

「地獄だ」

さうつぶやくのが僕の耳に入るともなしに入る。何が地獄なもんか。僕の棺が出るのだつたら泣き崩れるくせに。まるで僕を愛してゐたやうに。同じことだ。物事が前後してかうなつたにすぎないぢやないか。

「さあ、早く片づけちやはなきや」

友人をはげますやうに僕は言つた。少しおつちよこちよいな所がある彼は、

「あいよ」

と、ぴよんと飛び立つた。

「ベットだ、ベットだ」

僕は荷物を車に積む順序として、ベットを指定した。

「いいおむこさんだ」

前にはさう言つてゐた妻の両親に、目に物見せてやらずばといふ快感があつた。室内には荷造りの縄目が白く一つ一つつきりと、正確にある間隔を置いて出来あがつてゐる。ベットの上には何も置いてない。妻と交感を重ねた場所。いく度か桃色の光の中で、

「好きよ」

「絶対に離さない。君のゐない人生なんて考へられない」

と言ひあつた場所。天井板の一枚一枚の様子が、ある時は猥雑にさへ見えたのに、もはや、老女の局所の模様としか見えない。

「ただいま」

「あら、いま赤ちやんがねついたばかりよ。いけないパパさん。酔つたりして。お酒くさいわ」

人間の顔はどうしてこんなにも変化するのであらう。かつて媚態を示した顔は、鬼よりも恐しい形相だ。友人が裾に廻つて、僕が頭の方に手をかけた。ダブルベットは重い。二人の
大の男が力を入れてみたが、動かない。ベットまでが敵の味方をするのか。

「ああ、わかつたわかつた。動かないわけだ、ひつかかつてる」

と、僕は叫んだ。友人は身体が小さいので畳の上に腹這ひになつてベットの下にもぐりこんだ。一本一本、ベットの足をたしかめて、ひつかかつてゐるのを畳のへりから外してくれた。

「今度は大丈夫」

僕をベットの下から見上げた奴は、男色者のやうな白つぼい黒目を見せて、にやりと笑つた。妻が脱兎の如く奴に飛びかかった。

「何をなさるんですか」

奴も憎しみをこめて言つた。妻はベットの足にしがみついた。

「これは、私のものです。私たちのものです」

僕は私たちとは誰のことかと思つて、すぐに、ははんと思つた。

「私たちだつて」

「さうだよ」

「おい、かまはない、持ち上げろ」

僕と友人は今度はベットを持ち上げることが出来た。妻がベットの足にかじりつくので重くなつて、ずるずる引きずつた。畳の目を縦に切つた。

「これだけは駄目。いけないわよ」

「何を言つてるんだ。いまさらになつて。このベットは俺がまだ一人である頃、神楽坂の古道具屋から買ったものだ」

「わあ、わあ」

「おちつきなさい。僕はこの家をおとなしく出て行くと言つてゐるんだよ」

僕は妻が、もはや僕の妻でないと思つた。僕は友人とベットを持ちあげたままの姿勢で、右の足で女の肩のあたりを、どしんと蹴つ飛ばした。ベットの角が廊下の柱にひつかかつたが、さつさと車に積み込んだ。妻はあとの荷物を積み込むあひだ、ずうつと丸くなつて泣いてゐた。僕は自動車の助手席に乗つた。僕が自分のものを、自分の妻を、もう自分のものではないと感じたのは、蹴つ飛ばした時だつた。その女との距離は遠ざかつた。

彼に僕の涙は見えなかつたらしい。二人のあひだをしばらく音楽が流れ、《ベットの争奪》をそれぞれの思ひで思ひかへしてゐるといつた時間がすぎた。やがて彼はゆつくりと言つた。

「よくわかりました」

「どうかな。帽子は僕の頭にかへつたが、あの女は僕にはかへつて来なかつた」

「あたりまへぢやないか」

「未練があるのではないよ。事実を言つてゐるんだ。事件と言つてゐた意味は可能性の問題を言ひたいのではない。僕が別れた妻をはつきり離別したと感じたのは、ベットの下にかじりつく女の肩を蹴つたときからなんだけど、それが僕の意識あつた時、一番僕とあの女の

あひだに、真実のふれあひがあつたことがわかつたんだ」

「帽子を追ひかけてみてか」

「僕の姿勢がつんのめるやうになつて、なほ僕を置き去りにした帽子。帽子との距離」

「なんだか、しやれた恰好だつたらしいな」

「うん。あの時の僕の伸ばした手を、君は僕の蹴飛ばした足と思つてみれば、わかつてくれるんぢやないかな」

「距離の問題もか」

「永遠の空間的距離といふ意味でね」

「だから、大事件か。帽子は君の頭にもどつたけど、別れた妻は君の所にはもどつて来ない」

「妻のことは、どうでもいいんだ。つと、触れさうになつた瞬間、帽子との距離はちぢめることが出来る感じだつた。僕が実感したのは、帽子を追ひかけてゐる時、僕は本当に生きることが出来るさうだな、と思つたといふこと」

「なまなましい空間か」

「さう。なまの人間である自分を、駆け出してゐて感じた。女を蹴飛ばしたことも同時に。女もベッドの足を握りしめた時、僕といふ人間を実感的に感じたのではなかつたか。失つたのは僕ばかりでなく、向ふもさうだつたのだから」

「よさう。気が滅入る」

「ああいい音楽だな。わかつてくれればいいな、と思ふよ」

《この数日後に僕は一人で沼を見に行く》

僕が沼のほとりに近づくと、僕の近づく速度に比例して、水面がぐいぐいもりあがつて来た。冬の日をあびて、所々がもりあがつてさざ波が白く輝いてゐた。思つたよりずっと広い。遠く対岸には松林が低くつらなり、それは途中でぎつくりと切られ、切られたあたりは赤土だつた。松林はそこをすぎると、まだうすくかすれてつづいてゐた。沼のほとりは曲線を描いてこちらにつづくのだが、半島のやうなものが出てゐるので、その松の林はぐつと近く緑色が濃く茂つてゐるのが見えた。波はほとんどない。ぴつたりとしづまつた沼の面をゆるがすものは、小舟が二隻、浮かんでゐるのが、竿を使つてゐるので小さな波紋を散らしてゐるだけであつた。赤土の見えるあたりは干拓のための土砂を提供するために切りとられたといふ。風光を傷つけることはなほだしいものと思へたが、いや、ああした傷あとはあつた方が僕には好ましい。人生の傷あとがまんざらでもないやうに。そこは削り取られてひくくなつてゐるといふのに、対岸から見てゐると松林よりも、もり上つて、生き生きして見える。土層のうねりがこちらからは小さい波になつて、なまじつかにぶい銀色の沼の面よりも、波うつ姿の微妙な波動を感じさせる。水面よりも面白い赤い波の動きを、うつとりと僕は眺め入つた。松林はまたひくくつらなりはじめ、なんとなく沼の水面とまじはるやうになる。そして、しばらくすると松林が終つて枯草の原になる。紫色に光る沼のはじの方の水面、うす茶色の枯草の原。半島が突出してゐるのはそこらあたりからだが、急激にぐんぐん前面に乗り出した突出部は、僕のすぐ側に現はれて、うしろの沼の面を隠してしまふ。半島はちやうど僕に頭をつき出すやうにしてゐる。水面のゆれ動いてゐるのは、舟が竿さしてゐるからだが、半島が頭をゆさぶつてゐるからだと言つてもよささうだ。松の木の一本一本がくつき

り、うしろの青空を透かしてみせる。向ふ側が枯草がつづいてあるのやら、松林があるのやら、見当はつかない。僕の足下の砂は、ここも海のやうに砂がしめつてあるのだが、その砂は青土がねつとりしてあるやうなのでべとついてある。沼のほとりはずうつとこんな砂なのだろう。立つてみるといつのまにか自分の身体が沈んでしまひさうだ。沼の面をよく見てみると、かすかな流れもあるやうだ。どうも、一方にばかりひつぱられて動いてあるやうに思へる。一面にうすい膜のやうなものが、どんよりした沼の水面にはりつめてゐて、それが静かに何ものかにひつぱられてゐるらしい。僕は水辺にゐて、どうもそれ程緊張してゐると思へない水面なのに、どんよりしてゐるなりにひつぱられてゐる様子を見つめた。これが沼らしい特徴なんだな、と思つた。ここに、こんな静かな沼があるのとは無関係に、すぐうしろの道路を自動車が走つて行く。警笛を無遠慮に鋭くひびかせてゐる。沼のほとりに来た時には、沼の静かな様子に気をとられて警笛には気づかなかつた。僕の意識が背後に自動車をみとめ、警笛の鋭さをとらへた時、何日か前の事件を急に思ひ出した。同時に、僕は不安になつた。警笛が沼にひびくと、赤い線が沼の水面に描かれるのではないかと思つた。そんなことになつたら、だいなしになつてしまふ。僕は自分の心をせつかくこんなにも静めることが出来てゐるのに。

僕の立つてゐるすぐ側から栈橋が水中に出てゐた。二十メートル程の長さのもので、栈橋といつても、ドラムカンを並べた上に三枚の板を縦に並べて太い針金でくくつてあるものだ。ゆれないやうに、太い竹の杭を何本も立てて、栈橋を歩く時、竹の杭が身の支へにもなつた。僕は注意しながら栈橋に足をかけ、板の上を先の方に歩いて行つた。一番先端に立つて、もう一度沼を見渡した。三十度位の所に太陽がうすぼんやりとした丸い白い光になつて見えてゐる。全体に、強烈なもののないことに親近感を持つことが出来た。どうするあてもなく、僕はそこにしばらく立つてゐた。沼のほとりに視線をやり、僕がぐるつと見廻して、広い眺望に我を忘れた時だつた。僕は沼が一つの輪になつてゐると気づいた。輪になつた沼は、輪まはしの輪と考へることが出来る。僕の視線の中で、沼の輪が僕の位置を地面につく所として、空中におつ立つた。ぐるぐると廻りはじめた。時間がどのくらゐたつたのやらわからない。僕は自動車の警笛を聞いた。沼の面に赤いものが走り去つた。ああ、もう夕方になつたのか。僕は我にかへつて、沼の上の太陽が赤い光を送つて来てゐるのを認めた。僕はポケットから煙草とマツチを出した。僕は煙草を口にして、マツチで火をつけた。燃えさしを沼に投げ入れた。ぽつと、沼が燃え立つたのかと思つた。夕焼の赤い色は沼一面にひろがつた。遠くの松の林もちらちら燃え上る焰のやうに見える。ため息の出るやうな緊張した風景だつた。輪まはしは終つた。しかし、その時だつた。僕が自分にもわからない動作したのは。栈橋がほんの少しゆれたからなのか、自動車の警笛に心を奪はれたためなのか。僕は思はず両腕を上にあげた。さうしてゐる自分に驚いて、手をもとにもどさうとしてバランスを崩した。右手の指先が、まるで、さうしようといふ意志があつたやうに、僕の帽子を、ひよいとはねた。帽子はすつぱりと僕の頭から離れて、帽子はさうする意図のないことを示すかのやうに、栈橋になつてゐる板の上にぴよこんと落ちた。そこでとどまることなく、ドラムカンの上にはずり落ち、ドラムカンの円い側面に沿つて、すうつと生きもののやうに沼の水面に浮いた。僕は杭をしつかり握りしめた。ベツトの足を握つたかつての日の妻の手。あそこに突出した半島のどす黒い姿は、僕が蹴つた僕の足のやうに強力に、僕にガクンといふ衝撃をあたへた。すべてのものを失つてしまつたのだ。僕は帽子の沈んで行くのを見つめた。

僕は、一本の棒のやうに立ちつくした。僕の子供はどうなつたのかな、と思つた。僕は周囲の夕焼の景色を眺めた。それは見事なものだつた。沼の水面ばかりでなく、空全体がしばらくのあひだ赤く燃えさかつてゐた。